

## 現代ロシアのマスメディアにおける憎悪表現 — 2001 年～ 2005 年 —

宮 川 真 一

### はじめに

本稿の目的は、現代ロシアのマスメディアではいかなる対外イメージが形成されているかを検討することである。その際、第二次チェチェン戦争の主体とされるチェチェン人に対する偏見を中心に考察する。ここではロシアのマスメディアにおける憎悪表現<sup>1)</sup>に関する研究報告書を用い、2001 年から 2005 年までの期間を対象とする。以下、グローカリゼーション、ロシア・ナショナリズムの台頭、イメージ・ステレオタイプ・偏見、マスメディアのチェチェン・イメージ、米国同時多発テロ事件 (2001 年)、モスクワ劇場占拠事件 (2002 年)、ロシア連邦下院選挙 (2003 年)、北オセチア学校占拠事件 (2004 年)、北オセチア事件 1 年後 (2005 年) の 9 つの項目について順に論じていきたい。

### 1. グローカリゼーション

21 世紀を迎えた今、グローバリゼーションの大波が世界中を巻き込み、人類史上未曾有の大転換期を迎えていることは幾多の識者が指摘するところである。武者小路公秀は、今日のグローバル化時代が 3 つの意味で近代西欧文明が危機にさらされる時代であると主張する。第 1 に、近代西欧文明に由来する「普遍的」価値が押し付けられることにより、これに対する積極的・消極的な反発としてローカルな反西欧の原理主義的な抵抗が生まれ、さまざまな文化の間で衝突が引き起こされている。第 2 に、新自由主義・グローバル経済は商品化文明を作り出した。天然資源の商品化は生態系を脅威にさらし、人間の商品化は人心を荒廃させている。第 3 に、グローバルな危機的状況を政治的・軍事的に表現する反テロ戦争では、米国内で潜在的なテロリストとしてイスラム諸国出身者を監視下に置いている。イスラム文明は反テロ戦争において、近代西欧文明の潜在的な敵となっている<sup>2)</sup>。

近年「グローカリゼーション」という概念が提起されてきている<sup>3)</sup>。中野毅によれば、「グローバリゼーションは、他方で世界の多様性を進展させ、国民的、または民族的、地域的な固有性の再構成と再主張を伴って進展するがゆえに、グローバ

ルなローカル化 (Global localization), グローカリゼーションとなる」<sup>4)</sup>。このグローカリゼーションは自分自身や所属する集団を相対化して眺め、それらについて問い直す契機となる。グローバリゼーションはローカルな自分や自分の環境について考え直すことを提起していく過程でもある。それゆえ「ローカリゼーションは、グローバリゼーションの反動や反グローバル化の動きではなく、グローバリゼーションの進展に伴って必然的に出てくるプロセス」<sup>5)</sup>と捉えることができる。

神川正彦によれば、グローカリゼーションを比較文明の視点で捉えるならば、西欧文明が中心文明にせり上がった19世紀的文明状況が、「脱中心化」することによって変容しつつあると解することができる。19世紀近代において、西欧文明が中心文明にせり上がることによって、すべての非西欧文明は周辺文明として位置づけられることとなった。その後一世紀以上の時が経過するなかで中心文明としてのあり方が周辺へと流入し、西欧文明のさまざまな文化要素が世界に拡散した。そのことによって中心文明はその中心性を拡散しつつ衰弱化し、かえって脱中心化せざるを得ない。その反作用として周辺文明はその周辺性を変容しつつ自立化しつつあると考えられる。それは非西欧文明の「脱周辺化」の過程を意味している<sup>6)</sup>。要するに、19世紀近代に中心文明にのし上がった西欧文明は決して唯一の普遍文明ではない。今日の世界では「〈中心文明〉としてのヨーロッパ文明の〈脱中心化〉と、したがって同時に〈周辺文明〉としての非ヨーロッパ文明の〈脱周辺化〉」が進行していると神川は主張する<sup>7)</sup>。

## 2. ロシア・ナショナリズムの台頭

ベレストロイカからソ連消滅に至る一連の出来事は、世界的なグローカリゼーションの流れの中に位置づけることができるであろう。ソ連消滅をめぐる国内外の劇的な変動により、ロシアは再び世界史の舞台に登場した。帝政時代におけるロシアの統合原理は「専制・正教・民族性」であり<sup>8)</sup>、ソ連時代にその原理は「共産党一党独裁・共産主義イデオロギー・ソビエト人」に置き換わった。ソ連消滅の後に残されたロシアでは、政治的・経済的・社会的混乱とともに精神の空白状態が生まれている。国家統合の原理についてロシアはまだ解を見出しておらず、ロシアおよびロシア人は深刻なアイデンティ・クライシスの状態にある。新生ロシアのグローカリゼーションとは、ロシア文明が西欧文明から自立する過程を意味している。ソ連の消滅を経験したこの地域では、さまざまなアイデンティティが激しく揺れ動き、再編成されてきた<sup>9)</sup>。その中で、ロシアでは文明としての自覚が高まり、比較文明研究も進展している。こうした研究はロシアにおけるグローカリゼーションの進行を裏づけていると解することができる<sup>10)</sup>。

ロシアにおけるグローカリゼーションは、ナショナリズムと宗教の復興を促している。こうした潮流のメインストリームに位置するロシア・ナショナリズム<sup>11)</sup>を、ここでは暫定的に表2-1のように区分したい。まず、世俗的ナショナリズムにおける国家主義の過激派に位置づけられるのが、ドゥーギン、ジリノフスキーといっ

た人物であり、ネオ・ユーラシア主義などの思想であり、『ザフトラ』などの新聞である。穏健派にはプーチン首相、巨大与党「統一ロシア」、軍・旧 KGB・治安組織などが該当する。世俗的ナショナリズムにおける民族主義の過激派として、第一次チェチェン戦争、極右団体「ロシア民族統一」、ネオナチ、スキンヘッドなどが挙げられる。穏健派にはレベジやロシア文化論などが該当する。宗教的ナショナリズムにおける国家主義の担い手として、ロシア正教会のイオアン府主教や新聞『正教ルーシ』が過激派を代表し、総主教の地位やロシア文明論が穏健派を代表する。宗教的ナショナリズムにおける民族主義では、極右団体「パーミヤチ」やイスラム嫌い・反ユダヤ主義といった風潮が過激派を代表し、作家ソルジェニーツィンやロシア正教会のアレクシー二世総主教らが穏健派に位置づけられよう。

### 3. イメージ・ステレオタイプ・偏見

イメージとは、人間がさまざまな社会での出来事の中で現実により得ると信じている観念であり、頭に描いている人や物に対する像である。このイメージは、ある人のアイデンティティと深く関わる精神領域の重要な一部である。社会におけるアイデンティティは、それがフィルターとなって外の世界に対する主観的な像を結びがちである。しかもその像は、その国や民族の利害がからむほどに、不遜・身勝手・侮辱的・一面的なものになりやすい<sup>12)</sup>。国際関係においては、国家や民族はさまざまなナショナリズムによって統合されている。この事実は、どの集団も程度の差はあるにしても他の集団を「よそ者」とみなし、排他的になりがちであるということの意味する<sup>13)</sup>。イメージ・ステレオタイプ・偏見は家庭や学校での教育、マスメディアなどによって意識的、無意識的に学習される。ある集団や社会は全ての成員を均質化しようとするから、その集団や社会の文化全体に、特有のイメージ、ステレオタイプ・偏見が組み込まれることになる<sup>14)</sup>。

ステレオタイプとは、「特定の社会や集団の構成員の間で、ひろく受容されている、集団や制度などについての単純化された固定的・画一的な観念やイメージ」<sup>15)</sup>のことである。ステレオタイプは集団に対する特徴づけそのものであり、主として観察の次元にとどまる。また、事実と符号するもの、肯定的なものも含まれる<sup>16)</sup>。偏見とは、「相手がある社会・文化に属しているという理由だけでその集団の嫌な性質をもっていると一般化され、嫌悪・敵意ある態度の対象とされてしまうといった不当なカテゴリー化」<sup>17)</sup>である。偏見は集団に対する態度を含み、行動の次元にまで及ぶ。また、事実と反する否定的なイメージである<sup>18)</sup>。

偏見には次のような社会的機能が指摘されている。1つに功利的機能であり、人が他者に対して偏見を持つことで自らの所属する集団で称賛・奨励される。2つに自己防御的機能であり、他者に偏見を抱くことで自らにとって不快な現実から目を背けさせてくれる。3つに価値表出機能であり、自分たちが信奉しているある価値観を表現したいがために、他者に偏見を持つ。4つに知識・認知機能であり、自分の世界を最も適切に構築するために他者に対して偏見を持つというものである<sup>19)</sup>。

偏見が行動として表現される形式は、その強弱の違いにもとづいて次の5種類に分類される。1つに偏見を口にする「誹謗」であり、これは最も程度の弱い形である。2つに「回避」であり、偏見の対象となる集団の成員とは接触しない態度である。3つに「差別」であり、居住地や政治的権利などから偏見対象集団の成員を排除しようとする。4つに「身体的攻撃」で、感情的な興奮状態の下で、ある集団が半ば暴力的にその地域から排除される場合である。5つに「絶滅」で、リンチ・虐殺・大量殺戮が実行される<sup>20)</sup>。一般に社会の混乱は偏見を生みやすい。こうした状況では敵意・不満・恐怖心などが強まり、より弱い集団に対して自己防衛を図ろうとするからである。災害・戦争などの時にそれはより顕著に現れ、異教徒や少数民族に対して普段では想像できないような残虐な行為がなされることもある。さらに政治指導者の煽動や世論操作によって国家的規模の偏見が生まれることもある<sup>21)</sup>。

#### 4. マスメディアのチェチェン・イメージ

2001年の「9・11」事件、2002年のモスクワ劇場占拠事件以降、ロシアのマスメディア規制は強化されるとともに通常化した。今日、全てのテレビ局と主要な新聞は政府の統制下に置かれている。新生ロシアではテレビ放送は一挙に拡大した。全国ネットのテレビ局は政治的影響力が大きい<sup>22)</sup>。新聞は3つのグループに分けられる。第1のグループは大部数、大衆路線、プーチン支持の新聞であり<sup>23)</sup>、第2のグループは小部数、エリート路線、政府批判の新聞であり<sup>24)</sup>、第3のグループは中位の部数、低俗路線、政治的関心のないタブロイド新聞である。ロシアのメディアを今後大きく変える可能性を秘めているのがインターネット系のニュースである<sup>25)</sup>。その利用人口は数百万の単位であるが、今後拡大すると見られている<sup>26)</sup>。

ロシア人ジャーナリストのアンドレイ・バビーツキーによれば、ロシアの一般市民は政府から流れてくるプロパガンダのなかにどっぷり漬かっている。普通の人びとはチェチェン人に対し、「チェチェン人は遺伝的に犯罪者になる傾向がある」、「テロリスト又はギャング」というイメージを持っている。こうしたイメージはチェチェン戦争前から、マスメディアから執拗に流されてきている。ロシアのマスメディアにおけるチェチェン人イメージは悪魔化されてきており<sup>27)</sup>、実際チェチェン人に関するいかなる報道も憎悪表現に満ちていると言われる。バビーツキーは2年間チェチェンで暮らしており、「チェチェン人は非常に勤勉な民族で、土地をしっかりと耕し、家畜を愛して育て、子どもたちにも愛情を注いで育て、朝から晩まで一生懸命働く人びと」であり、「ロシアのほかの地域に住む平均的なロシア人となんら変わることはない人びと」だと述べる。それにもかかわらず、チェチェン人に対する偏見があるのは、「権力によるメディア規制、情報統制」の結果でもある<sup>28)</sup>。

チェチェン嫌いはイスラム嫌いに変化してきている。ロシアの一部ジャーナリストと政治家は、チェチェン戦争をハンチントンによる「文明の衝突」と解釈する。これは「イエス・キリストの正教戦士」と「侵略的なイスラム狂信者・分離主義者」に対する戦争なのだ。普通のロシア市民の目には、イスラムのイメージは

「邪悪なチェチェン」と重なる。ロシア政治エリートの中には外国のイスラム原理主義者がチェチェンを牛耳っていると見る人もいる<sup>29)</sup>。多くのロシア人にとって、ひげを生やしてカラシニコフ自動小銃を手に緑色の鉢巻をした男はチェチェン分離主義のシンボルであり、チェチェンのステレオタイプでもある。今日のロシアではテロリズムという言葉にはイスラムという形容詞が付いて回るようになった<sup>30)</sup>。

## 5. 米国同時多発テロ事件（2001 年）

「9・11」以降、ロシアではイスラム嫌いがさらに顕著となっていく。ロシア政府の見解では、イスラム・テロリズムとチェチェン分離主義が結び付けられようとした。モスクワ市民も、「9・11」の首謀者はイスラム過激主義者と認識している<sup>31)</sup>。「9・11」はロシアにとって、イスラム過激主義勢力による国際テロの脅威への対処が必要であり、チェチェン共和国におけるロシアの軍事行動があくまでも国際テロのネットワークへの対策であるとの年来の主張を欧米諸国に理解させる絶好の機会であった。プーチン大統領は事件の当日から際だった対米協調姿勢を示した。彼は事件の直後にテレビ演説を行い、「我々はあなた方と共にある。我々はあなた方と痛みを心から共にする。我々はあなた方を支持する」とアメリカ国民に呼びかけた。プーチンは各国首脳の中でもいち早くブッシュ大統領に電話し、米国支持を打ち出している。9月24日、プーチンはテレビ演説で、ロシアが米国の対テロ戦争を支援することを宣言した<sup>32)</sup>。モスクワ市の世論も、プーチンのこの路線をどちらかといえば支持している<sup>33)</sup>。

「9・11」事件の後、ロシアのマスメディアにおける憎悪表現の対象を分析したのが表5-1である<sup>34)</sup>。この時期には「9・11」事件とその後の「反テロ戦争」の性格を反映して、カフカス諸民族、ユダヤ人、イスラム教徒、アメリカ人に対する憎悪報道が目立っている。チェチェン人は38件で第8位、全体の4.91%を占めている。

表5-2は、この調査で観察されたチェチェン人に対する憎悪表現の内容を示している。その中で、憎悪表現の程度としては軽度の「民族・宗教集団の否定的イメージを創出すること」と、中度の「いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること」が多数を占めている。重度の憎悪表現は11件（140件）でその占める割合は15%（11%）、中度は35件（532件）で47%（42%）、軽度は28件（591件）で38%（47%）となっている。チェチェン人に対する憎悪表現は、重度と中度が全体より高い数値を示し、軽度が全体平均より低いものとなっている。

## 6. モスクワ劇場占拠事件（2002 年）

2002年10月23日夜、モスクワ南東の劇場に多数の武装集団が突如侵入し、860人ほどの人質を取って立てこもった。この武装集団はモブサル・バラエフ野戦司令官が率いるチェチェン武装勢力で、女性を含む総勢およそ50人であった。モスク



ワ市民は彼らを狂人とみなした<sup>35)</sup>。10月25日夜、ジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤが武装集団との交渉を開始した。彼らの要求はロシア軍のチェチェンからの撤退であった。ロシア当局は彼らの要求を受け入れている。しかしその翌朝、ロシア内務省特殊部隊が劇場内に強行突入し、武装グループのほぼ全員を射殺、人質128人の犠牲を出しながら事件は終息した<sup>36)</sup>。モスクワ市の世論は劇場急襲という決定を支持している<sup>37)</sup>。

モスクワ劇場占拠事件の後、ロシアのマスメディアに表れた憎悪表現の対象を調査したものが表6-1である<sup>38)</sup>。この事件の性格を反映してチェチェン人に対する憎悪表現が最も多く、218件で全体の23.14%を占めている。また、ユダヤ人、カフカス人、アメリカ人、ロシア人、西欧人、イスラム教徒が上位を占めている。

また、表6-2はこの時期のチェチェン人に対する憎悪表現の内容を示すものである。軽度の「民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的又は非礼な文脈で言及すること」、中度の「いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること」が多数観察されている。重度の憎悪表現は24件(123件)で10%(12%)、中度は50件(236件)で21%(22%)、軽度は167件(705件)で69%(66%)を占めている。チェチェン人に対する憎悪表現は、重度と中度のものが全体平均を下回り、軽度のものが平均をやや上回っている。

## 7. ロシア連邦下院選挙 (2003年)

2003年12月7日、ロシア連邦では下院選挙が実施された。全国の有権者総数はおよそ1億835万人で、全国の平均投票率は55.75%であった。今回の下院選では、比例区において議席を獲得することの出来るボーダーラインである得票率5%を上回ったのが、「統一ロシア」、「ロシア共産党」、「ロシア自民党」、「母国」ブロックの4政党・選挙ブロックであった。与党の「統一ロシア」は224議席を獲得したが、その後諸派などの議員が移籍して304議席となっている。それまで退潮傾向にあったジリノフスキー率いる「ロシア自民党」は比例区での得票率を倍増させて復活し、前回の17議席から36議席へと倍増させた。新選挙ブロックの「母国」は39議席を得て大きく躍進している。一方、「ロシア共産党」は82から53へと大きく議席を減らして第一党の座から滑り落ちている。「右派勢力連合」、「ヤープロコ」といった民主主義を志向するリベラル政党は比例区での議席を失って大敗した。今回の選挙で躍進した「統一ロシア」、「ロシア自民党」、「母国」ブロックはいずれも国家によって創設されており、下院選の時点でどれも大統領に忠実であり、みなナショナリスト政党である<sup>39)</sup>。

表7-1はロシア下院選を前にした時期のロシア・マスメディアにおける憎悪表現の対象を示している<sup>40)</sup>。カフカス人、ユダヤ人、ロシア人、アメリカ人、アジア諸民族が上位を占めている。チェチェン人は57件で第7位、全体の5.43%を占めている。

また表7-2はこの時期のチェチェン人に対する憎悪表現の内容を示すものであ

る。軽度の「民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的または非礼な文脈で言及すること」、中度の「いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること」が多数を占めている。重度の憎悪表現は4件(126件)で7%(11%)、中度は16件(214件)で27%(19%)、軽度は39件(774件)で66%(70%)を占めている。重度と軽度の憎悪表現が全体平均より少なく、中度が全体平均より多くなっている。

## 8. 北オセチア学校占拠事件(2004年)

2004年9月1日朝、ロシア南部・北オセチア共和国ベスラン市の「第一学校」に、男女の武装集団33人が押し入った。この日は新学期の初日で、始業式に参加していた生徒や親、教師らおよそ1300人が人質となる。9月3日午後1時頃、校庭に入ったロシア兵が銃撃を開始した。その後2回の爆発音とともに激しい銃撃戦が始まり、午後2時過ぎには特殊部隊が学校を制圧した。死者は330人と発表されている。ロシア国内の世論調査では、学校占拠事件はチェチェン人あるいは国際テロ組織の仕業とみる人が多い<sup>41)</sup>。ロシアでは今回の事件で反カフカス感情が高まり、チェチェン人を含むカフカス系市民に対する襲撃や暴行が相次いでいる<sup>42)</sup>。この事件におけるプーチンの指揮を評価するロシア国民は6割程度である<sup>43)</sup>。

表8-1は北オセチア学校占拠事件後のロシア・マスメディアにおける憎悪表現の対象を示している<sup>44)</sup>。この事件の性格からチェチェン人が第1位であり、59件で全体の28.2%を占めている。その他、イスラム教徒、カフカス諸民族が上位を占めている。

また、表8-2はチェチェン人に対する憎悪表現の内容を示している。軽度の「民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的又は非礼な文脈で言及すること」、中度の「いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること」が多数を占めている。重度の憎悪表現は5件(24件)で9%(13%)、中度は14件(39件)で25%(20%)、軽度は37件(127件)で66%(67%)を占めている。重度と軽度の憎悪表現は全体の平均より低く、中度は全体平均より高い数値を示している。

## 9. 北オセチア事件1年後(2005年)

表9-1は北オセチア学校占拠事件から1年後のロシア・マスメディアにおける憎悪表現の対象を示している<sup>45)</sup>。チェチェン人は4番目に多く、19件で全体の8.64%を占めている。その他、イスラム教徒、カフカス諸民族が上位を占める傾向は前回の2004年度調査と同様である。

また、表9-2はチェチェン人に対する憎悪表現の内容を示している。軽度の「民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的又は非礼な文脈で言及すること」、軽度の「いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること」が多数を占めている。重度の憎悪表現は2件(21件)で8%(11%)、中度は3件(35件)で12%(18%)、軽度は20件(140件)で80%(71%)を占めている。重度と中度の憎

悪表現は全体の平均より低く、軽度は全体平均より高い数値を示している。

## むすび

以上の考察から、次のことが明らかになったと言えよう。第1に、表10-1に示されるように、2001年から2005年にかけてチェチェン人に対する憎悪表現は量的に増大する傾向にあるものの、質的には軟化してきているということである。第2に、表10-2に示されるように、チェチェン人に対する報道は侮辱的であり、その犯罪性を強調し、偏見を煽る論調となっているということである。第3に、表10-3に示されるように、カフカス諸民族、イスラム教徒に対する憎悪表現の比重が高まってきているということである。

現代ロシアではグローバリゼーションの進展により、ロシア・ナショナリズムが台頭している。そして、第二次チェチェン戦争の進行と泥沼化は、チェチェン人にとどまらずカフカス諸民族、イスラム教徒への偏見を拡大していると見ることができる。本稿では2001年から2005年まで、憎悪表現の量的な側面を中心に扱った。2006年以降の状況、憎悪表現の質的な側面の検討が、次の課題となる<sup>46)</sup>。

表2-1 ロシア・ナショナリズムの諸相

		国家主義	民族主義
世俗的 ナショナリズム	過激派	ドゥーギン、ジリノフスキー ネオ・ユーラシア主義 『ザフトラ』、『ソビエト・ロシア』	第一次チェチェン戦争 「ロシア民族統一」 ネオナチ、スキンヘッド
	穏健派	プーチン、「統一ロシア」 軍・旧 KGB、治安組織 ロシア共産党 「公正ロシア」	レベジ ロシア文化論
宗教的 ナショナリズム	過激派	イオアン府主教 『正教ルーシ』 『ロシアの家』	第二次チェチェン戦争 「バーミヤチ」 イスラム嫌い 反ユダヤ主義
	穏健派	総主教 ロシア文明論	ソルジェニーツィン アレクシー二世総主教

出典：Thomas Parland, "Russia in the 1990s: Manifestation of a Conservative Backlash Philosophy", in Chris J. Chulos, Timo Piirainen (eds.), *The Fall of an Empire, the Birth of a Nation: National Identities in Russia*, Ashgate, 2000, pp.123-125；中野毅『宗教の復権—グローバリゼーション・カルト論争・ナショナリズム』東京堂出版、2002年、19～20、230～234ページ；A. Верховский (сост.), *Русский национализм: идеология и настроение*, М.: Информационно-аналитический центр «Сова», 2006；石郷岡建「浮上するロシア・ナショナリズム」『ユーラシア研究』[特集I ユーラシア研究所シンポジウム「新プーチン体制とユーラシア」] 第39号、東洋書店、2008年、2～7ページ。



表5-1 ロシアのマスメディアにおける憎悪表現の対象  
(2001年10月～2002年4月)

順位	対 象	件数	割合
1	非ロシア人	94	12.14%
2	カフカス・ザカフカス諸民族	73	9.43%
3	ユダヤ人	71	9.17%
4	メスヘティア・トルコ人	53	6.85%
5	アメリカ人	51	6.59%
6	アジア諸民族	44	5.68%
7	ジプシー	40	5.17%
8	チェチェン人	38	4.91%
9	イスラム教徒	35	4.52%
10	アルメニア人	32	4.13%
11	ロシア人	27	3.49%
12	中央アジア諸民族	25	3.23%
13	アゼルバイジャン人	24	3.10%
14	黒人	20	2.58%
15	クルド人	19	2.45%
16	カトリック教徒（ユニアト教徒）	16	2.07%
16	ウクライナ人	16	2.07%
18	アラブ人	14	1.81%
19	アフガン人	13	1.68%
20	エストニア人	12	1.55%
20	非白人	12	1.55%
22	非スラブ人	11	1.42%
23	タタール人	8	1.03%
24	非キリスト教徒	6	0.78%
24	非正教徒	6	0.78%
26	小規模の新宗教集団	5	0.65%
27	エホバの証人	4	0.52%
28	サイエントロジー	2	0.26%
28	パキスタン人	2	0.26%
30	イスラム教の新しい流れ	1	0.13%
合計		774	100%

出典：(Сост.) А.М. Верховский, *Язык мой...Провлема этнической и религиозной нетерпимости в российских СМИ*, М.: РОО «Центр “Панорама”», 2002, с.29-32.

表5-2 チェチェン人に対する憎悪表現の内容 (2001年10月～2002年4月)

	種 類	件数 (全体)	程度
A	暴力を直接及び率直に呼びかけること	2 (18)	重度
B	暴力を一般的なスローガンとして呼びかけること	2 (20)	重度
C	差別を直接及び率直に呼びかけること	2 (22)	重度
D	差別を一般的なスローガンとして呼びかけること	2 (22)	重度
E	暴力及び差別を暗に呼びかけること	3 (58)	重度
F	民族・宗教集団の否定的イメージを創出すること	19 (311)	軽度
G	暴力及び差別の歴史的事件を正当化すること	3 (31)	中度
H	暴力及び差別の一般に認められた歴史的事実を疑問視するような発表及び発言をすること	3 (40)	中度
I	民族・宗教集団の名称を侮辱的な文脈で言及すること	0 (44)	軽度
J	いずれかの民族・宗教集団それ自体の欠点について主張すること	2 (62)	軽度
K	いずれかの民族・宗教集団それ自体の歴史的犯罪について主張すること	2 (23)	中度
L	差別する目的で、民族・宗教集団とロシア及び外国の政治及び国家構造との関係を指摘すること	1 (14)	中度
M	いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること	17 (176)	中度
N	いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること	2 (83)	軽度
O	いずれかの民族・宗教集団が物質的な豊かさ、権力構造における代表権、新聞雑誌において不釣り合いに優越していると推論すること	1 (40)	中度
P	いずれかの民族・宗教集団の社会、国家、ナショナル・アイデンティティの浸食への否定的な影響を非難すること	4 (78)	中度
Q	民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的または非礼な文脈で言及すること	4 (69)	軽度
R	いずれかの民族・宗教集団に帰属する移民がある地域で定住することを認めないよう呼びかけること	4 (130)	中度
S	外国人嫌いの発言及び文書をしかるべき注解なしで引用すること	1 (22)	軽度
合計		74 (1263)	

出典：(Сост.) А. М. Верховский, *Язык мой...Провлема этнической и религиозной нетерпимости в российских СМИ*, М.: РОО «Центр “Панорама”», 2002, с.34-35, 42-43.

表6-1 ロシアのマスメディアにおける憎悪表現の対象  
(2002年10月～2003年2月)

順位	対 象	件数	割合
1	チェチェン人	218	23.14%
2	その他の民族のカテゴリー	86	9.13%
3	ユダヤ人	73	7.75%
4	カフカス人全体	71	7.54%
5	アメリカ人	69	7.32%
6	ロシア人	46	4.88%
7	西欧人	44	4.67%
8	イスラム教徒	37	3.93%
9	その他のカフカス及びザカフカス諸民族	34	3.61%
10	中国人	31	3.29%
11	黒人	27	2.87%
12	その他のアジア諸民族	24	2.55%
13	一般的な民族的外国人嫌い	22	2.34%
13	アゼルバイジャン人	22	2.34%
15	小規模な新宗教集団	18	1.91%
16	その他の宗教的カテゴリー	17	1.80%
16	ジプシー	17	1.80%
18	ウクライナ人	15	1.59%
19	アルメニア人	14	1.49%
19	カトリック教徒 (及びユニアト教徒)	14	1.49%
21	アラブ人 (イラク人以外)	11	1.17%
22	タジク人	10	1.06%
22	正教徒	10	1.06%
24	ベトナム人	9	0.96%
25	メスヘティア・トルコ人	2	0.21%
26	イラク人	1	0.11%
合計		942	100%

出典：Ксенофобия в российских СМИ Мониторинг. Промежуточный мониторинг Языка Вражды. 24 октября 2002-23 февраля 2003., Информационно-аналитический центр “СОВА” [<http://sova-center.ru>] (2009. 10. 28.) с.8-9.

表6-2 チェチェン人に対する憎悪表現の内容 (2002年10月～2003年2月)

	種 類	件数	程度
A	暴力を呼びかけること	11 (12)	重度
B	一般的なスローガンも含め、差別を呼びかけること	7 (28)	重度
C	暴力及び差別を暗に呼びかけること	5 (23)	重度
D	民族・宗教集団の否定的なイメージをつくり出すこと	2 (13)	軽度
E	暴力及び差別の歴史的事件を正当化すること	1 (3)	中度
F	暴力及び差別の一般に認められた歴史的事実を疑問視するような発表及び発言をすること	0 (0)	中度
G	いずれかの民族・宗教集団それ自体の欠点について主張すること	11 (89)	軽度
H	いずれかの民族・宗教集団それ自体の歴史的な犯罪について主張すること	0 (6)	中度
I	いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること	38 (100)	中度
J	いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること	17 (167)	軽度
K	いずれかの民族・宗教集団が物質的な豊かさ、権力構造における代表権、新聞雑誌において不釣り合いに優越していると推論すること	5 (70)	中度
L	いずれかの民族・宗教集団の社会、国家に対する否定的な影響を非難すること	4 (47)	中度
M	民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的または非礼な文脈で言及すること	132 (404)	軽度
N	いずれかの民族・宗教集団に帰属する移民がある地域で定住することを認めないよう呼びかけること	1 (60)	重度
O	明らかに外国人嫌いの発言及び文書を、ジャーナリストと回答者との間の立場の違いをはっきりさせずに引用すること	5 (32)	軽度
P	権力奪取の試み又は領域的拡張のかどで集団を非難すること	2 (10)	中度
合計		241 (1064)	

出典：Ксенофобия в российских СМИ Мониторинг. Промежуточный мониторинг Языка Вражды. 24 октября 2002-23 февраля 2003., Информационно-аналитический центр "COBA" [http://sova-center.ru] (2009. 10. 28.) с.3-4, 10-11, 20-21.

表7-1 ロシアのマスメディアにおける憎悪表現の対象  
(2003年9月～2003年12月)

順位	対 象	件数	割合
1	その他の民族のカテゴリー	93	8.87%
2	カフカス人全体	92	8.77%
3	ユダヤ人	79	7.53%
4	ロシア人	68	6.48%
5	一般的な民族的外国人嫌い	60	5.72%
6	アメリカ人	59	5.62%
7	チェチェン人	57	5.43%
8	中国人	54	5.14%
9	アゼルバイジャン人	51	4.86%
10	その他のアジア諸民族	50	4.77%
11	その他のカフカス及びザカフカス諸民族	49	4.67%
12	ウクライナ人	47	4.48%
13	西欧人	44	4.19%
14	ジプシー	38	3.62%
15	タジク人	33	3.15%
16	黒人	29	2.76%
17	イスラム教徒	25	2.38%
18	小人数の新宗教集団	22	2.10%
19	アルメニア人	21	2.00%
20	ベトナム人	19	1.81%
21	アラブ人（イラク人以外）	13	1.24%
21	その他の宗教的カテゴリー	13	1.24%
23	正教徒	12	1.14%
24	カトリック教徒（及びユニアト教徒）	9	0.86%
25	メスヘティア・トルコ人	6	0.57%
26	一般的な宗教的外国人嫌い	3	0.29%
26	イラク人	3	0.29%
合計		1049	

出典：Галина Кожевникова (Под. ред. А. Верховский), Язык Вражды в предвыборной агитации и вне ее. Мониторинг прессы: сентябрь 2003-март 2004г., Информационно-аналитический центр “СОВА” [http://sova-center.ru] (2009. 10. 26.) Москва, 2004г., с.15.



表7-2 チェチェン人に対する憎悪表現の内容 (2003年9月～2003年12月)

	種 類	件数	程度
A	暴力を呼びかけること	1 (12)	重度
B	一般的なスローガンも含め、差別を呼びかけること	0 (32)	重度
C	暴力及び差別を暗に呼びかけること	1 (16)	重度
D	民族・宗教集団の否定的なイメージをつくり出すこと	4 (73)	軽度
E	暴力及び差別の歴史的事件を正当化すること	0 (1)	中度
F	暴力及び差別の一般に認められた歴史的事実を疑問視するような発表及び発言をすること	0 (0)	中度
G	いずれかの民族・宗教集団それ自体の欠点について主張すること	0 (103)	軽度
H	いずれかの民族・宗教集団それ自体の歴史的な犯罪について主張すること	1 (7)	中度
I	いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること	14 (100)	中度
J	いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること	1 (198)	軽度
K	いずれかの民族・宗教集団が物質的な豊かさ、権力構造における代表権、新聞雑誌において不釣り合いに優越していると推論すること	0 (31)	中度
L	いずれかの民族・宗教集団の社会、国家に対する否定的な影響を非難すること	1 (36)	中度
M	民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的または非礼な文脈で言及すること	34 (393)	軽度
N	いずれかの民族・宗教集団に帰属する移民がある地域で定住することを認めないよう呼びかけること	2 (66)	重度
O	明らかに外国人嫌いの発言及び文書を、ジャーナリストと回答者との間の立場の違いをはっきりさせずに引用すること	0 (7)	軽度
P	権力奪取の試み又は領域的拡張のかどで集団を非難すること	0 (39)	中度
合計		59 (1114)	

出典：Галина Кожевникова (Под. ред. А. Верховский), Язык Вражды в предвыборной агитации и вне ее. Мониторинг прессы: сентябрь 2003-март 2004г., Информационно-аналитический центр "СОВА" [http://sova-center.ru] (2009. 10. 26.) Москва, 2004г., с.6-7, 17-18.

表8-1 ロシアのマスメディアにおける憎悪表現の対象  
(2004年9月～2004年10月)

順位	対 象	件数	割合
1	チェチェン人	59	28.8%
2	イスラム教徒	26	12.7%
3	カフカス人全体	24	11.7%
4	イングーシ人	22	10.7%
5	その他の民族のカテゴリー	10	4.88%
6	少人数の新宗教集団	9	4.39%
7	その他のアジア諸民族	7	3.41%
7	一般的な民族的外国人嫌い	7	3.41%
9	アゼルバイジャン人	6	2.93%
10	その他のカフカス及びザカフカス諸民族	5	2.44%
10	アメリカ人	5	2.44%
12	ユダヤ人	4	1.95%
12	アルメニア人	4	1.95%
14	ウクライナ人	3	1.46%
15	西欧人	2	0.98%
15	ロシア人	2	0.98%
15	中国人	2	0.98%
15	ジプシー	2	0.98%
19	タジク人	1	0.49%
19	黒人	1	0.49%
19	メスヘティア・トルコ人	1	0.49%
19	アラブ人	1	0.49%
19	その他の宗教的カテゴリー	1	0.49%
19	一般的な宗教的外国人嫌い	1	0.49%
合計		205	100%

出典：Галина Кожевникова, Язык Вражды в СМИ после Беслана: Поиск враги и ответственность журналистов, Информационно-аналитический центр “СОВА” [http://sova-center.ru] (2009. 10. 28.) Москва, 2004г., с.13-14.

表8-2 チェチェン人に対する憎悪表現の内容 (2004年9月～2004年10月)

	種 類	件数	程度
A	暴力を呼びかけること	1 (2)	重度
B	一般的なスローガンも含め、差別を呼びかけること	2 (8)	重度
C	暴力及び差別を暗に呼びかけること	1 (4)	重度
D	民族・宗教集団の否定的なイメージをつくり出すこと	4 (12)	軽度
E	暴力及び差別の歴史的事件を正当化すること	0 (0)	中度
F	暴力及び差別の一般に認められた歴史的事実を疑問視するような発表及び発言をすること	0 (0)	中度
G	いずれかの民族・宗教集団それ自体の欠点について主張関すること	1 (9)	軽度
H	いずれかの民族・宗教集団それ自体の歴史的な犯罪について主張すること	1 (1)	中度
I	いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること	12 (26)	中度
J	いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること	5 (22)	軽度
K	いずれかの民族・宗教集団が物質的な豊かさ、権力構造における代表権、新聞雑誌において不釣り合いに優越していると推論すること	0 (0)	中度
L	いずれかの民族・宗教集団の社会、国家に対する否定的な影響を非難すること	1 (8)	中度
M	民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的又は非礼な文脈で言及すること	26 (80)	軽度
N	いずれかの民族・宗教集団に帰属する移民がある地域で定住することを認めないよう呼びかけること	1 (10)	重度
O	明らかに外国人嫌いの発言及び文書を、ジャーナリストと回答者との間の立場の違いをはっきりさせずに引用すること	1 (4)	軽度
P	権力奪取の試み又は領域的拡張のかどで集団を非難すること	0 (4)	中度
合計		56 (190)	

出典：Галина Кожевникова, Язык Вражды в СМИ после Беслана: Поиск враги и ответственность журналистов, Информационно-аналитический центр “СОВА” [http://sova-center.ru] (2009. 10. 28.) Москва, 2004г., с.3-4, 16.

表9-1 ロシアのマスメディアにおける憎悪表現の対象  
(2005年9月～2005年10月)

順位	対 象	件数	割合
1	一般的な民族的外国人嫌い	44	20%
2	イスラム教徒	20	9.09%
3	カフカス人全体	22	10%
4	チェチェン人	19	8.64%
5	ジプシー	17	7.73%
6	ウクライナ人	15	6.82%
7	中国人	11	5%
8	ユダヤ人	10	4.55%
9	西欧人	9	4.09%
10	黒人	7	3.18%
10	その他のアジア諸民族	7	3.18%
12	タジク人	6	2.73%
12	アメリカ人	6	2.73%
14	アゼルバイジャン人	5	2.27%
15	その他のカフカス及びザカフカス諸民族	4	1.82%
16	ロシア人	3	1.36%
16	アルメニア人	3	1.36%
16	少人数の新宗教集団	3	1.36%
19	アラブ人	2	0.91%
19	メスヘティア・トルコ人	2	0.91%
19	その他の民族的カテゴリー	2	0.91%
22	カトリック教徒（ユニアト教徒を含む）	1	0.46%
22	その他の宗教的カテゴリー	1	0.46%
22	一般的な宗教的外国人嫌い	1	0.46%
合計		220	100%

出典：Галина Кожевникова (Под. ред. А. Верховский), Язык Вражды через год после Беслана, Информационно-аналитический центр “СОВА” [http://sova-center.ru] (2009. 10. 28.) Москва, 2005г., с.13-14.

表9-2 チェチェン人に対する憎悪表現の内容 (2005年9月～2005年10月)

	種 類	件数	程度
A	暴力を呼びかけること	0 (3)	重度
B	一般的なスローガンも含め、差別を呼びかけること	0 (2)	重度
C	暴力及び差別を暗に呼びかけること	1 (2)	重度
D	民族・宗教集団の否定的なイメージをつくり出すこと	3 (16)	軽度
E	暴力及び差別の歴史的事件を正当化すること	0 (0)	中度
F	暴力及び差別の一般に認められた歴史的事実を疑問視するような発表及び発言をすること	0 (0)	中度
G	いずれかの民族・宗教集団それ自体の欠点について主張関すること	0 (5)	軽度
H	いずれかの民族・宗教集団それ自体の歴史的な犯罪について主張すること	1 (1)	中度
I	いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること	1 (10)	中度
J	いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること	4 (32)	軽度
K	いずれかの民族・宗教集団が物質的な豊かさ、権力構造における代表権、新聞雑誌において不釣り合いに優越していると推論すること	0 (10)	中度
L	いずれかの民族・宗教集団の社会、国家に対する否定的な影響を非難すること	0 (3)	中度
M	民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的又は非礼な文脈で言及すること	13 (87)	軽度
N	いずれかの民族・宗教集団に帰属する移民がある地域で定住することを認めないよう呼びかけること	1 (14)	重度
O	明らかに外国人嫌いの発言及び文書を、ジャーナリストと回答者との間の立場の違いをはっきりさせずに引用すること	0 (0)	軽度
P	権力奪取の試み又は領域的拡張のかどで集団を非難すること	0 (10)	中度
Q	市民権の否定	1 (1)	中度
合計		25 (196)	

出典：Галина Кожевникова (Под. ред. А. Верховский), Язык Вражды через год после Беслана, Информационно-аналитический центр “СОВА” [http://sova-center.ru] (2009. 10. 28.) Москва, 2005г., с.3, 16-18.



表 10-1 チェチェン人に対する憎悪表現の推移 (2001 年～2005 年)

	2001 年	2002 年	2003 年	2004 年	2005 年
順位	8 位	1 位	7 位	1 位	4 位
割合	4.91%	23.14%	5.43%	28.2%	8.64%
重度	15% (+)	10% (-)	7% (-)	9% (-)	8% (-)
中度	47% (+)	21% (-)	27% (+)	25% (+)	12% (-)
軽度	38% (-)	69% (+)	66% (-)	66% (-)	80% (+)

※数値が全体平均を上回っていれば「+」、下回っていれば「-」と表示している。

表 10-2 チェチェン人に対する憎悪表現の種類 (2001 年～2005 年)

	種 類	件数	割合
A	暴力を呼びかけること	17	3.75%
B	一般的なスローガンも含め、差別を呼びかけること	13	2.87%
C	暴力及び差別を暗に呼びかけること	11	2.43%
D	民族・宗教集団の否定的なイメージをつくり出すこと	32	7.06%
E	暴力及び差別の歴史的事件を正当化すること	4	0.88%
F	暴力及び差別の一般に認められた歴史的事実を疑問視するような発表及び発言をすること	3	0.66%
G	いずれかの民族・宗教集団それ自体の欠点について主張すること	14	3.09%
H	いずれかの民族・宗教集団それ自体の歴史的な犯罪について主張すること	5	1.10%
I	いずれかの民族・宗教集団の犯罪性について主張すること	82	18.10%
J	いずれかの民族・宗教集団の道義的欠陥について主張すること	29	6.40%
K	いずれかの民族・宗教集団が物質的な豊かさ、権力構造における代表権、新聞雑誌において不釣り合いに優越していると推論すること	6	1.32%
L	いずれかの民族・宗教集団の社会、国家に対する否定的な影響を非難すること	10	2.21%
M	民族・宗教集団又はその代表それ自体を侮辱的または非礼な文脈で言及すること	209	46.14%
N	いずれかの民族・宗教集団に帰属する移民がある地域で定住することを認めないよう呼びかけること	9	1.99%
O	明らかに外国人嫌いの発言及び文書を、ジャーナリストと回答者との間の立場の違いをはっきりさせずに引用すること	7	1.55%
P	権力奪取の試み又は領域的拡張のかどで集団を非難すること	2	0.44%
合計		453	100%

表10-3 憎悪表現の主要民族的・宗教的対象別割合 (2001年～2005年)

	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	平均
カフカス諸民族合計	28.42%	38.32%	26.31%	59.02%	25%	35.41%
イスラム教徒	4.52%	3.93%	2.38%	12.68%	9.09%	6.52%
ユダヤ人	9.17%	7.75%	7.53%	1.95%	4.55%	6.19%
アメリカ人	6.59%	7.32%	5.62%	2.44%	2.73%	4.94%
新宗教集団合計	1.55%	1.91%	2.10%	4.39%	1.36%	2.26%
カトリック教徒合計	2.07%	1.49%	0.86%	—	0.46%	0.98%

## 注

- 1) 「憎悪表現」とは普通、人種、民族、宗教等の要素に起因する憎悪や嫌悪の表現を指し、英語では hate speech と呼ばれる。小谷順子「合衆国憲法修正1条の表現の自由とヘイトスピーチ」『日本法政学会法政論叢』第36巻、第1号、1999年；同「米国における表現の自由とヘイトスピーチ規制—Virginia v. Black, 123 S. Ct. 1536 (2003) 判決を踏まえた検討—」『法政論叢』第40巻、第2号、2004年、参照。本稿で用いる報告書ではロシア語で язык вражды (敵意言語) と呼ばれる。通常のメディアでは量的な手法が用いられるが、外国人嫌いを隠さない右翼的・左翼的反対派などの特殊なメディアでは質的な手法が用いられる。本稿では前者を扱う。A. M. Верховский, Этническая и религиозная ксенофобия в СМИ: как определять и как реагировать [http://www.eawarn.ru/pub/About/WebSeminarTakisAug/Verkhovsky.htm] (2009. 10. 28.) 参照。
- 2) 武者小路公秀『人間安全保障論序説—グローバル・ファシズムに抗して—』国際書院、2003年、23～26ページ。
- 3) 例えば山田敦『「グローカリゼーション」と国家の変容』『国際政治』第124号「国際政治理論の再構築」2000年；中野毅『宗教の復権—グローバル化・カルト論争・ナショナリズム』東京堂出版、2002年；星川啓慈・山梨有希子編『グローバル時代の宗教間対話』大正大学出版会、2004年；前川啓治『グローカリゼーションの人類学 国際文化・開発・移民』新曜社、2004年；中野毅 (研究代表者)『世界のグローバル化と宗教的ナショナリズム・原理主義の台頭に関する比較宗教学的的研究』[平成14～17年科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書] 2007年；神田外語大学国際社会研究所編『グローカリゼーション—国際社会の新潮流』神田外語大学出版局、2009年。
- 4) 中野毅「グローバリゼーション論の再検討と宗教問題」『ソシオロジカ』(創価大学社会学会) 第30巻、第2号、2006年、37ページ。
- 5) 同前、38ページ。
- 6) 神川正彦『比較文明文化への道—日本文明の多元性—』[刀水歴史全書72 (比較文明学叢書5)] 刀水書房、2005年、150、168～169ページ。
- 7) 神川正彦「比較文明文化の現代的課題—21世紀における文明間の対話へ—」伊東俊太郎監修、吉澤五郎・染谷臣道編『文明間の対話に向けて—共生の比較文明学—』世界

- 思想社, 2003 年, 113 ページ。
- 8) これに関しては次を参照。竹中浩「帝政期におけるロシア・ナショナリズムと同化政策—沿バルト地域のロシア化を手掛かりにして—」『ナショナリズムの現在 戦後日本の政治』岩波書店, 1994 年; 同「近代ロシアにおけるナショナリズムと宗教政策—ロシア帝国における福音主義的セクトの問題をめぐって—」『ロシア史研究』第 64 号, 1999 年; 池庄司敬信『ロシア 体制変革と護持の思想史』中央大学出版部, 2001 年, 第 13 章「ロシアの保守主義」; 土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』[興亡の世界史 第 14 卷] 講談社, 2007 年。
  - 9) この点に関する社会学的な研究書として, М. К. Горшков, Н. Е. Тихонова (отв. ред.); Институт комплексных социальных исследований РАН, *Российская идентичность в условиях трансформации: опыт социологического анализа*, М.: Наука, 2005.
  - 10) 2001 年以降にロシアで出版された, 比較文明学をベースとする, ロシア文明をテーマとした書物を検討した結果, それらの書はいずれも現代ロシアで文明的アイデンティティが強まり, ロシア文明が西欧文明から自立する傾向にあることを表現している。ここで取り上げた書物は, 学校教科書『学校教科書『ロシア文明, 9-20 世紀末』(2003 年); ロシア史研究所『ロシア多民族文明: 統一と対立』(2003 年); 世界史研究所『文明』第 6 卷 (2004 年); 世界史研究所『文明』第 7 卷 (2006 年) である。拙稿「現代ロシアにおけるローカリゼーション—比較文明の視点—」『ソシオロジカ』(創価大学社会学会) 第 33 卷, 第 1・2 号, 2009 年, 参照。
  - 11) ロシア・ナショナリズムは「ロシア人とその社会, 国家が創り出し, 担ってきた固有の価値を信じ, それに基づいて独自の国家体制, 経済制度, 文化的価値体系を構築することを志向する教義, 精神的・文化的, さらに政治的実践である」と定義される。中村裕「ロシア・ナショナリズム」川端香男里ほか監修『[新版] ロシアを知る事典』平凡社, 2004 年, 850 ページ。現代ロシア・ナショナリズムについては, 以下も参照。拙稿「極右団体『ロシア民族統一』の思想—アレクサンドル・バルカシヨフの言説を中心に—」『ロシア・東欧学会年報』第 28 号, 2000 年; 同「現代ロシアにおける『カルト』現象と『反カルト運動』—オウム真理教を事例として—」『ソシオロジカ』第 27 卷, 第 1・2 号, 2003 年; 同「現代ロシアにおける『ロシア正教ファンダメンタリズム』」『ロシア・東欧学会年報』第 31 号, 2003 年; 同「現代ロシアのナショナル・アイデンティティと『第二次チェチェン戦争』」『比較文明』第 21 号, 2005 年; 同「現代ロシアの公教育における宗教教育—『正教文化の基礎』コース導入をめぐって—」『ロシア・東欧学会年報』第 34 号, 2005 年; 同「公教育における宗教教育とナショナリズムの現在—ロシアと日本を比較して—」『通信教育部論集』第 9 号, 2006 年。
  - 12) この点については, 次を参照。芝原拓自「対外観とナショナリズム」『対外観』[本近代思想体系 12] 岩波書店, 1988 年; 加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ—相手国のイメージ研究—』[学振選書 1] 日本学術新興会, 1991 年; 東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』ミネルヴァ書房, 1996 年。
  - 13) 衛藤藩吉ほか『国際関係論』東京大学出版会, 1982 年, 160 ページ。

- 14) 同前, 166 ページ。
- 15) 石井敏ほか編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』[有斐閣選書] 有斐閣, 1997 年, 98 ページ。
- 16) 衛藤『国際関係論』162 ページ。
- 17) 古田暁監修, 石井敏ほか『異文化コミュニケーション [改訂版]』[有斐閣選書] 有斐閣, 1996 年, 117 ページ。
- 18) 衛藤『国際関係論』162 ページ。
- 19) 石井『異文化コミュニケーション』117～118 ページ。
- 20) Gordon W. Allport, *The Nature of Prejudice*, Addison-wesley publishing company, 1954, pp.14-15; G・W・オルポート (原谷達夫・野村昭訳)『偏見の心理』培風館, 1968 年, 13 ページ; 古田暁ほか『異文化コミュニケーションキーワード [新版]』[有斐閣双書] 有斐閣, 2001 年, 43 ページ。
- 21) オフェル・フェルドマン「偏見」猪口孝ほか『政治学事典』弘文堂, 2000 年, 1000 ページ。
- 22) 現在全国放送している3大テレビ局は,「第一チャンネル [OPT]」(国営・視聴者1億5000万),「ロシアテレビ [PTP]」(国営・1億3000万),「独立テレビ [HTB]」(民営政府寄り・1億2000万)。その他「センターテレビ [TBI]」(モスクワ市営中立・6000万)などの地方テレビや衛星放送テレビ, 各種の専門テレビ局がある。
- 23) 例えば,『コムソモリスカヤ・プラウダ』(日刊・291万),『モスコフスキー・コムソモレツ』(日刊・231万部),『論拠と事実』(週刊・292万部)など。
- 24) 例えば,『コメルサント』(日刊・12万部),『新イズベスチヤ』(日刊・10万部),『独立新聞』(日刊・4万部),『ノーバヤ・ガゼータ』(週2刊・2万部)など。
- 25) ロシアには政府, 民間, 地域, 商業など3000以上のニュース・サイトがある。
- 26) ここでは以下を参照。ナジェージダ東井・井桁貞義『ロシア・インターネットの世界』[ユーラシア・ブックレット No.11] 東洋書店, 2001 年; 鈴木康雄「プーチンのメディア政策」木村汎・佐瀬昌盛編『プーチンの変貌? 9・11以後のロシア』勉誠出版, 2003 年, 第10章; 川端『ロシアを知る事典』504～505 ページ。
- 27) 1999 年, NATO がユーゴスラビアを空爆した際の英米の報道には,「敵を悪魔化する」という潮流が含まれていた。「敵の悪魔化」は単にプロパガンダの副産物であるというよりは, 近代戦争の原理であるという見方もある。湾岸戦争ではフセインが悪魔化され, コソボ戦争ではミロシェビッチだけでなくセルビア人全てが悪魔化された。そのようなジャーナリズムのあり方は, 戦争の政治的・経済的・社会的要因から目をそらし, プロパガンダとして機能するようになる。門奈直樹『現代の戦争報道』[岩波新書 (新赤版) 881] 岩波書店, 2004 年, 64～70 ページ。
- 28) ここでは次を参照。Валерия Ахметьева, «Дюди с песьими головами»: образ чеченцев в российских СМИ, Александр Верховский (Сост.), *Язык вражды против общества*, М.: Информационно-аналитический центр «Сова», 2004г.; Я. З. Ахмадов, Чеченский вопрос в современной литературе и средствах массовой информации, Х. И. Ибрагимов; В. А. Тишков (отв.ред.); Институт этнологии и

- антропологии им. Н. Н. Миклухо-Маклая Комплексный НИИ РАН, г. Грозный, Чеченская Республика и чеченцы: история и современность: материалы Всероссийской научной конференции. Москва, 19-20 апреля 2005 года, М.: Наука, 2006; М. М. Ибрагимов, И. З. Хатуев, Освещение чечетской тематики в российских электронных СМИ, Там же; Ан드レイ・バビーツキー「戦争の脅威は北コーカサス全体に広がりつつある」『世界』2006年1月号。
- 29) Dmitri V. Trenin and Aleksei V. Malashenko; with Anatol Lirven, *Russia's Restless Frontier: the Chechnya Factor in Post-Soviet Russia*, Carnegie Endowment for International Peace, Washington, D. C., 2004, p.63.
- 30) *Ibid.* p.71. イスラム報道の問題性については、板垣雄三『イスラーム誤認：衝突から対話へ』岩波書店、2003年、を参照。
- 31) 「モスクワ人から見た2001年9月11日」と題して「ロミール」が2002年9月、18歳以上のモスクワ市民500人を対象に実施した面接調査結果 [[http://www.romir.ru/socpolit/actual/09\\_2002/september-11.htm](http://www.romir.ru/socpolit/actual/09_2002/september-11.htm)] (2002.09.21.)。
- 32) さらにロシアはNATOとのテロ対策協力体制を確立すべく行動を起こした。10月初めにブーチンはNATO本部を訪れ、国際テロリズムという共通の敵に対してロシアとNATOの協力関係の強化が不可欠であると述べている。拙稿「『第二次チェチェン戦争』におけるテロリズム」『ソシオロジカ』（創価大学社会学会）第28巻、第2号、2004年、92～94ページ。
- 33) 注24、参照。
- 34) この研究はロシアにおける4つのNGO（情報—研究センター「パノラマ」、モスクワ・ヘルシンキグループ、民主主義・人権発展センター、グラスノスチ擁護基金）によるプロジェクト「ロシアのマスメディアにおける敵意言語：モニタリング及び社会的行動」の2001年9月から2002年8月にかけての成果である。マスメディアのモニタリング期間は2001年10月1日から2002年5月2日までのおよそ7ヶ月間である。調査対象は、連邦レベルでは連邦日刊紙10紙（Известия; Комсомольская правда; Красная звезда; Московский комсомолец; Независимая газета; Новые Известия; Российская газета; Советская Россия; Труд; Коммерсант）。連邦週刊紙5紙（Аргументы и факты; Версия; Литературная газета; Мегapolis-Экспресс; Россия）。ウェブサイト5件（Страна.Ру; Утра.Ру; Дни.Ру; СМИ.Ру; АПН.Ру）である。地方レベルでは以下の5地方とその調査対象が選択されている。ケメロボ州（シベリア連邦管区）では地方日刊紙3紙、地方週刊紙5紙。クラスノダール辺区（南連邦管区）では地方日刊紙4紙、地方週刊紙4紙。ベルミ州（沿ボルガ連邦管区）では地方日刊紙1紙、地方週刊紙6紙。リャザン州（中央連邦管区）では地方日刊紙3紙、地方週刊紙4紙。サンクトペテルブルク市（北西連邦管区）では地方日刊紙4紙、地方週刊紙2紙。これら新聞・ウェブサイト上では545件の憎悪報道が観察されており、それらを対象や種類ごとに分析している。（Сост.）А. М. Верховский, *Язык мой...Провлема этнической и религиозной нетерпимости в российских СМИ*, М.: РОО «Центр "Панорама"», 2002, с.4-48.
- 35) モスクワ劇場占拠事件について、「全ロシア世論調査センター」が2002年10月30・31



- の両日、モスクワ市民500人を対象に実施した電話調査の結果 [http://www.wciom.ru/vciom/new/press/021101\_moscow.htm] (2003.04.19.)。
- 36) 拙稿「現代ロシアのナショナル・アイデンティティと『第二次チェチェン戦争』」149ページ。
- 37) 注28, 参照。
- 38) これは前節で参照したプロジェクト「ロシアのマスメディアにおける敵意言語：モニタリング及び社会的行動」の続編である。モニタリングの期間は2002年10月24日から2003年2月23日までの4ヶ月間である。調査対象は連邦レベルに限定されている。連邦日刊紙8紙 (Известия; Комсомольская правда; Московский комсомолец; Независимая газета; Новые Известия; Советская Россия; Коммерсант, Россия), 連邦週刊紙2紙 (Аргументы и факты; Мегapolis-Экспресс), 毎日の連邦テレビ番組4本 (25-й час [ТВЦ]; Петровка, 38 [ТВЦ]; Время [ОРТ]; Однако [ОРТ]), 毎週の連邦テレビ番組6本 (Другое время [ОРТ]; Времена [ОРТ]; Вести недели [РТР]; Зеркало [РТР]; Русский дом [Московия]; Свобода слов [НТВ]) となっている。ここでは観察された804件の憎悪表現を分析している。この調査報告書は書籍として出版されておらず、情報—分析センター「ソーバ」のウェブサイトから入手できる。Ксенофобия в российских СМИ Мониторинг. Промежуточный мониторинг Языка Вражды. 24 октября 2002-23 февраля 2003. Информационно-аналитический центр “COBA” [http://sova-center.ru] (2009.10.28.)。
- 39) 拙稿「2003年ロシア下院選における国家的理念—躍進3党の選挙綱領から—」『通信教育部論集』第8号, 2005年, 138～140ページ。
- 40) この研究は、これまで参照してきているプロジェクト「ロシアのマスメディアにおける敵意言語：モニタリング及び社会的行動」の続編である。モニタリングの期間は2003年9月から2003年12月までの4ヶ月間である。調査対象は連邦レベルと地方レベルに及んでいる。連邦レベルでは連邦日刊紙8紙 (Известия; Жизнь; Комсомольская правда; Московский комсомолец; Независимая газета; Новые Известия; Советская Россия; Россия), 連邦週刊紙2紙 (Аргументы и факты; Литературная газета) を対象とする。地方レベルでは以下の5地方にそれぞれ5地方紙が調査対象として選択されている。クラスノダール辺区 (南連邦管区), リャザン州 (中央連邦管区), ペルミ州 (沿ボルガ連邦管区), イルクーツク州 (シベリア連邦管区), サンクトペテルブルク市 (北西連邦管区)。ここでは、観察された870件の憎悪報道を分析している。この調査報告書は書籍として出版されておらず、情報—分析センター「ソーバ」のウェブサイトから入手できる。Галина Кожевникова (Под.ред. А. Верховский), Язык Вражды в предвыборной агитации и вне ее. Мониторинг прессы: сентябрь 2003-март 2004г., Информационно-аналитический центр “COBA” [http://sova-center.ru] (2009.10.26.) Москва, 2004г.
- 41) 「学校占拠事件を計画したのはだれか」について「世論基金」が2004年9月11・12日の両日、ロシア全土44地域100居住地点で1500人を対象に実施した面接調査結果。モスクワ市住民600人にも追加調査を実施した [http://bd.fom.ru/report/map/projects/dominant/dom0437/domt0437/domt0437\_1/d043709] (2004.09.18.)。

- 42) 拙稿「現代ロシアのナショナル・アイデンティティと『第二次チェチェン戦争』」149～150 ページ。
- 43) 「人質奪取事件に際してのプーチンの行動をどう評価するか」について「世論基金」が 2004 年 9 月 11・12 日、ロシア全土 44 地域 100 居住地点で 1500 人を対象に実施した面接調査結果。モスクワ市住民 600 人にも追加調査を実施した [[http://bd.fom.ru/report/map/projects/dominant/dom0437/domt0437/domt0437\\_2/d043710](http://bd.fom.ru/report/map/projects/dominant/dom0437/domt0437/domt0437_2/d043710)] (2004. 09. 23.)。
- 44) この研究は、これまで参照してきているプロジェクト「ロシアのマスメディアにおける敵意言語：モニタリング及び社会的行動」の続編である。モニタリングの期間は 2004 年 9 月 4 日から 2004 年 10 月 16 日までのおよそ 1 ヶ月半である。調査対象が前回とはやや異なり、連邦レベルに限定している。連邦日刊紙 7 紙 (Известия; Комсомольская правда; Московский комсомолец; Независимая газета; Новые Известия; Советская Россия; Коммерсантъ)、連邦週刊紙 3 紙 (Аргументы и факты; Мегapolis-Экспресс; Россия)、毎日の連邦テレビ番組 4 本 (25-й час [ТВЦ]; Петровка, 38 [ТВЦ]; Время [ОРТ]; Однако [ОРТ])、毎週の連邦テレビ番組 4 本 (Времена [ОРТ]; Вести недели [РТР]; Зеркало [РТР]; Русский взгляд [Московия]) を対象とする。ここでは、観察された 214 件の憎悪報道を分析している。この調査報告書は書籍として出版されておらず、情報分析センター「ソーバ」のウェブサイトから入手できる。Галина Кожевникова, Язык Вражды в СМИ после Беслана: Поиск враги и ответственность журналистов, Информационно-аналитический центр “СОВА” [<http://sova-center.ru>] (2009. 10. 28.) Москва, 2004г.
- 45) この研究は、これまで参照してきているプロジェクト「ロシアのマスメディアにおける敵意言語：モニタリング及び社会的行動」の続編である。モニタリングの期間は 2005 年 9 月 1 日から 2005 年 10 月 31 日までの 2 ヶ月間である。調査対象は連邦レベルに限定している。連邦日刊紙 8 紙 (Известия; Комсомольская правда; Московский комсомолец; Независимая газета; Новые Известия; Советская Россия; Газета; Жизнь)、連邦週刊紙 3 紙 (Аргументы и факты; Россия; Литературная газета)、毎日の連邦テレビ番組 3 本 (25-й час [ТВЦ]; Петровка, 38 [ТВЦ]; Однако [ОРТ])、毎週の連邦テレビ番組 5 本 (Время в воскресенье [ОРТ]; Вести недели [РТР]; Постскриптум [ТВЦ]; Русский взгляд [Московия]; Максимум [НТВ]) を対象とする。ここでは、観察された 193 件の憎悪報道を分析している。この調査報告書は書籍として出版されておらず、情報分析センター「ソーバ」のウェブサイトから入手できる。Галина Кожевникова (Под. ред. А. Верховский), Язык Вражды через год после Беслана, Информационно-аналитический центр “СОВА” [<http://sova-center.ru>] (2009. 10. 28.) Москва, 2005г.
- 46) 例えば, Вячеслав Лихачев, Язык Вражды в оппозиционных политических периодических изданиях, Верховский, Язык мой...; Галина Ковальская, Язык Вражды в Рязани: отчет по материалам командировки в город Рязань 2-5 июня 2002 г., там же.